平成２６年度第１回農業大学校外部評価委員会

議 事 録

Ⅰ　日　時　平成２６年５月２６日（月）　１０：３０～１２：００

Ⅱ　場　所　大分県立農業大学校　会議室

Ⅲ　参加者　外部評価委員

教育関係者	大分県高等学校教育研究会農業部会長 （日出暘谷・日出総合高等学校長）	清末　隆文 氏
生産者	大分県指導農業士会長	小野　順一 氏
生産者	地元女性農業者	古庄　京子 氏
卒業生	大分県立農業大学校同窓会副会長	湯浅　正徳 氏
農業団体	大分県農業協同組合常務（営農担当）	坂本　茂則 氏
行政	豊後大野市農業振興課長	伊東　克芳 氏
行政	大分県中部振興局生産流通部長	森本　　亨 氏

農業大学校

校長、副校長、次長、農学部長、教務・学生課担当

Ⅳ　次第

１　開会　　（進行：植木次長）

２　校長あいさつ

この外部評価委員会は、今年度本校の使命である。農業の次代を担う経営者の育成を実現するために、具体的な計画を作成し、それに基づいた取り組みを行い、その成果に対する外部の皆様方のご意見を伺いながら検証を行い、更に効果的な取り組みにつなげ、農業大学校をより魅力あるものにするため、平成２３年度に設置された。その都度、貴重な御意見、御提言をいただき、農業大学校への入学者数、就農率ともほぼ目標を達成するという状況になった。

今年度、農大の入学者、就農率の非常によい状況を更に昨年より以上の結果にするためには、また皆様方のご指導と忌憚のないご意見を賜らなければならないと思っている。

３　委員紹介

４　本校職員紹介

５　大分県立農業大学校評価制度について

副校長より資料Ｐ２～Ｐ６を説明

６　議事　　（議長：清末委員長）

（１）報告事項

平成２５年度の重点目標に対する取り組み結果

運営方針１「活気あふれる学園づくり」、運営方針２「質の高い教育の提供」、運営、方針３「新規就農者の確保」の取り組み結果について校長より説明。

《質疑・応答》

（清末委員長）

運営方針１の基礎学力が年々上がってきたと伺ったが、私も１年間、農業大学校に勤務していた。その時、職員の中から学生の基礎学力の向上について話があった。その一貫の取り組みとして推薦入試にも基礎学力試験を取り入れようと、その当時の坂本校長と準備をした。学生の基礎学力の把握をしておかないと出口の指導で、就職先の法人から要望がくるのではないかと話し合った経緯がある。伺う中で、年々基礎学力試験が１０点ずつ上がっているようであるが、内部でかなり強力に指導してきたのではないかと推測される。その取り組みについて説明をいただきたい。

（大学校）
　内部で取り組みをしたというよりも、むしろこういう試験をするということを学生募集で全高校に回るときにお知らせをしているため、高校の進路の先生も意識が高まってきたのではないかと考えられる。そのため数学の力がないと合格しないという高校側の意識の中で優秀な学生が集まってきたのではないかと思う。しかし点数の低い学生もいるため、そういった学生に対しては、選択科目にある基礎数学の履修、また、農薬や肥料の計算など現場で役立つ農業数学という科目を選択科目に設けるなどの取り組みを行っている。

（清末委員長）
　推薦入学にペーパーテストを導入するのはどうかとその当時思ったが、九州各県に問い合わせたところ約半数の県で実施しているとのことで、大分県でも導入してみようということになった。農業数学では問題を各関係の先生に作成していただき、冊子にまとめたという経緯がある。それは今でも使っているのか。
（大学校）
　今でも活用している。
（小野委員）
　推薦入試と一般入試で合格者が６１名。そのうちそれぞれ辞退した学生が５名いるが、入学前に辞退したのか、入学してある程度講義等受けた後で辞めたのか教えていただきたい。
（大学校）
　入学以前の辞退となっている。
（小野委員）
　辞退をした理由は把握をされているか。
（大学校）
　理由は主に経済的理由が多い。また毎年、受験だけして辞退をする学生もいる。
（清末委員長）
　入学する経費はどれくらいか
（大学校）
　３月末まで必ず支払わなければいけない金額が約４０万円である。あと合格したがやはり自分の考えていることと違うという理由もある。

（清末委員長）
　三重総合高校との高大連携について、その当時、地の利を活かした三重総合高校との連携で始めたのだが、昨年の１年生の総合実習の実施回数で１１／１５というのは、計画１５回のうち、１１回の実施ということか。また農大の学生も高校で学習が出来ないかということで、相互乗り入れについても実施をしているのか。
（大学校）
　１年生の総合実習については１５回の計画のうち１１回の実施である。相互乗り入れについては本校学生も高校での加工実習を行っている。

（森本委員）
　私も平成２３年度１年間こちらで勤務をした。昨年度、中部管内で４２名の新規就農者があったが、農大の学生が７名、研修部の学生３名、合計１０名で４分の１が農業大学校の学生ということで、今後も就農者が増えることを期待している。また昨年度、農協への就職が２名であるが、農協への就職に向けた指導など特別な対策を行っているのか。
（大学校）
　農協への就職について毎年１名は就職している。昨年は２名であった。ただ昨年は正職員に１名、臨時職員が１名。一昨年は臨時職員１名ということであるが、臨時職員でも２、３年後昇格試験に合格することにより正職員になれる道もある。臨時職員で賃金も安いが真面目に仕事に取り組むことにより、正職員になれるということで、臨時職員でも頑張るよう指導している。農協の試験に向けた取り組みについては特に行っていない。今年の学生も１名正職員として希望している。

（湯浅委員）
　ヤンマーの懸賞論文で全学生に対して取り組みをさせているのか。それとも科やコースごとで行っているのか。あるいは希望者で行っているのか。
（大学校）
　昨年の論文は総合経営特別講座の受講者６名が大分大学の学生と共同で作成した。６５０の応募の中から１３編に選ばれ、そのうち１人が２位となった。作文についてはそれぞれのコース担任の指導のもと参加をした。残念ながら昨年度は入賞に至らなかった。
（湯浅委員）
　うちの息子の時も担任の先生の指導のもとヤンマーの懸賞論文に出品し、入賞することができた。作文であれば取り組み易いので、どうせするなら全員に作文を書かせたらどうか。学生の将来の夢や意気込みなどを書かせることが大事なのではないか。
（大学校）
　作文については全学生を対象で良いと思うが、作文は論文とは違い担任の意向や考え方があり、作成については大変な労力が掛かるので強制してさせるのは難しい。ただ機運を高めていくことは大事である。論文については全員の参加は難しい。今年も総合経営特別講座での参加者８名が大分大学の学生との研究を行う予定である。全国的にみても単独で論文に取り組む農業大学校の学生もおり入賞する学生もいるが、かなりレベルを上げていかないと難しい。懸賞論文の講評の中で農大生と大分大学のコラボが良いのだとお話があった。ただの夢物語で終わるのでなく、実践が伴うことによって論文が仕上がってくるため、その中で農大生の役割が大きかったのではないかと思う。

（古庄委員）
　プロジェクト発表も毎年聞かせてもらっているが年々レベルが上がってきており、感心している。また学生の生活態度もよくなっていることが発表の中で感じられる。先生方の指導も熱心にされているのだと思う。
（大学校）
　昨年度は残念ながら九州大会では入賞を逃し、全国大会へ出場することはできなかった。今年はぜひ、全国大会への出場をめざし指導していきたいと考えている。
（清末委員長）
　その中で、もっと振興局や農業技術センターとの連携が益々必要となってくると思う。

（清末委員長）
　GAP の取得への取り組みについて大変時期を得たものではないかと思いますが、施設設備の策定ではどのあたりまで施設設備の改善がなされるのか教えてほしい。
（大学校）
　国の事業を活用して新たに農大として新規事業を起こし、今年度その予算が決まった。ソフト面では学生の法人就農に向けた質の高い学生を育てて行きたい。大分県でもそれぞれの法人に GAP の取得に向けた働きかけを行っている中で、GAP の意識を持った学生を増やしていくことが大事だということで今年は新しく GAP について学べる講座を設けた。それとハードの面でも GAP の取得に向け、施設の改善について取り組もうとしているが、施設が古いため取得は難しい。GAP 取得に向けて調整施設改善が重要となってくるため、新たに共同の調整施設の建設に対する予算がついたため今年より取り組んでいる。
（清末委員長）
　農業高校でも GAP 取得に取り組んでいる学校もあり、毎年必要経費が掛かるため県へお願いをしてきた。その結果、県からもそういった予算に対する配慮もいただき環境整備もできつつある。農業大学校でもそういった予算もとれたということで、これから GAP 取得に向けた学生への新たな指導ができるということで期待したいと思う。

（2）審議事項

平成２６年度運営方針を踏まえた数値目標と主な対策

運営方針１「活気あふれる学園づくり」、運営方針２「質の高い教育の提供」、運営方針３「新規就農者の確保」の方針に沿って、今年度の具体的な取組と数値目標等について校長より説明。

（古庄委員）

学生募集を行うのにマスメディアやホームページなどの広報もあるが、地域での農大OBの交流も利用してはと考える。農大OBの活発な交流によってその刺激を受け、農大に進学したいという高校生などが増えてくるのではないか。同窓生の役員も各地域にいると思うがその役員が誰なのかも分からない。活発に活動されている地域に出向き研修を行ってみたらどうか。そのため学校と連携を密にして取り組む必要があるのではないか。

（大学校）

平成２３年度に同窓会の活性化に対する問題が課題になった。その時も再度支部ごとに役員が巡回して、組織固めを行うことが検討された。平成２８年度は５０周年ということで、まさに記念行事のため同窓会の方にも深く関わっていただく必要があるため、同窓会の活性化が急務となっている。立派な先輩が沢山いる中で今年の経営者感覚育成講座では農大OBの方を講師に招き実施をしたいと考え、講師の選定について検討している。講座を受ける在校生についても優秀な卒業生の話を聞く中で将来への自信につながるのではないかと考える。各同窓会の支部の編成については現状を確認しながら活性化に向けて支援ができればと考えている。日田の方では湯浅委員を中心に毎年活発な活動がされているということで、その内容を他の地域にも伝えていきたいと考えている。

（伊東委員）

先輩OBからお話をいただくことは大変よいことである。豊後大野市内では農大のテストファームを受講した方がまだ卒業して３年しかたっていないが、市内で就農しピーマンの栽培を行っており、ピーマン部会の事務局長もされている。その方と東京・大阪に豊後大野市内のインキュベーションファームについての勧誘を行ったが、若い方の方は説得力がある。講演等においても学生の年齢に近い人が話をされると効果が高いのではと感じる。

（森本委員）

同窓会への挨拶回りで各地域に伺う中で、日田地域のようにまとまっている所もあれば、事務局長もいない、農大ＯＢが農業さえしていないといった地域もあった。

以前の坂本校長とも話す中で若手の人達のグループで盛り上げていたったらどうかという話もあった。それに関連して農大をPRするのに、自営就農や法人就農にしても各地域の後継者グループへの勧誘をする中で、農大のPRもしてもらったらどうか。

（湯浅委員）

昨年５月に同窓会を実施したが出席者が少なかった。今年は７月に実施予定である。全員に往復ハガキで出席を促すが、年代別に仲間を募って呼びかけを行う予定である。今と昔では農大の様子も違うため話が合わないこともあるが、事務局で調整をしながら参加しやすい雰囲気をつくることも必要だと考えている。

（坂本委員）

総合経営特別講座で流通の講義を行い、京都市場への流通研修も行い、現地に出向き実践することは大変良いことだと思う。GAPの取得も行っているが、あわせて学生にGAPの指導員の資格も在学中に取得させるとよいのではと思う。

（大学校）

総合経営特別講座の「消費者ニーズとマーケティング」の講義では農協の職員の方を講師に招きお話をいただいた。学生には非常に好評で、研修部の研修生も是非聞かせてほしいとのことで学生と一緒に聴講した。京都の市場への研修も１週間程度であったが、学生からは「１週間では足りない」といった感想や、受け入れ先の市場からは「もう少し長ければもっといろいろなことが教えられるのだが」といったお話もいただいた。今後、実施するにあたり検討していきたい。

GAPの指導員の資格の取得をさせたらどうかという件について、６月にＧＡＰの指導者基礎研修に本校の学生も5～6名が受講する予定である。今後も積極的に学生に参加させていきたいと思う。

（小野委員）
　将来の農業に夢みて頑張っている学生に同窓会の若い人たちが体験等を話してほしい。私たちの苦労話をしても心に響かないのではないか。
（清末委員長）
　同窓会の組織を強化するのは難しい。違う観点から考えた場合、サポーターとして県内各地にいる農大の勤務経験のある方に農大のサポーターや応援団として農大の良さを地域の方に伝えてもらうことも一つの方法ではないか。同窓会だけでなく違った方法で行ってみたらどうか。応援してくれる方がたくさんいると思う。

（小野委員）
　受験で各コースを選択する際偏りがある。学科・コースの乗り入れができないか。横のつながりをとってほしい。農作物を育てる際、化学肥料だけでは土壌が劣化してくる。そのため有機物の施用が必要になってくる。そのため耕畜連携を行って学習を深めてほしい。
（大学校）
　相互乗り入れについては６０人の学生の数や施設設備、コースの運営等が関係してくるため学生を配分しなければならない。畜産・耕種のお互いの理解できる経営者の育成のため学校側の指導も必要であると考えていえる。基本的に農業への理解を全員の学生にしてもらうことが目標で、その延長線上に野菜があり、花きがあり、作物があり、果樹があり、畜産があるという形の運営の仕方が必要である。すべてのことをコースにわけるのではなく農業への理解者をつくることが目的である。
（大学校）
　小野委員がおっしゃったとおり、コースに分かれるとコースのことしか学ばなくなってしまう。そのためコースの相互乗り入れは必要だと感じた。これからカリキュラムの中に他のコースの講義や実習に参加し学習できるカリキュラムづくりについても検討していきたい。
（清末委員長）
　高校では野菜や草花などの類型というものがあり、一時期、副類型というものがあり他の類型についても学ぶこともできた。単位数は少ないが、そこで学習することにより単位を認めるような体制もあった。農大でもコース・副コースとして可能か。他の大学校では２年生からコースを変えることができる学校もあると聞いている。本校でも可能かどうか検討してほしい。
（清末委員長）
　それではこれで全ての議事を終了する。次回は２月末の第２回の委員会で実施結果の報告をするので、ご出席をお願いしたい。

７　閉会